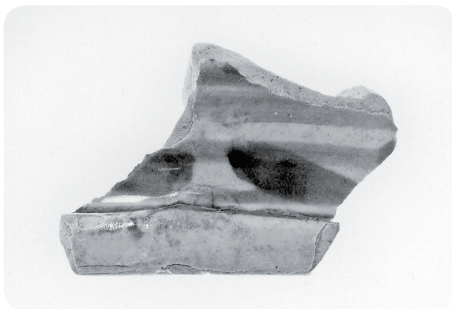
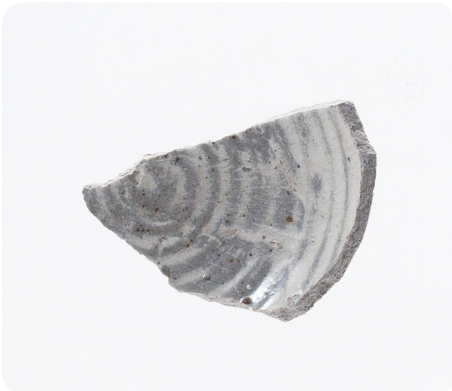


江戸時代の陶磁器

近世の遺跡では、城跡や物資の中継地点、村落で数多くの陶磁器が出土します。陶磁器の中には、その遺跡の性格をそのまま映す資料があります。宮津城の調査では、堀の中などからヨーロッパ製の陶器や朝鮮王朝（李朝）の椀などが出土しています。ヨーロッパ陶器は茶道の水指として、朝鮮王朝の椀は茶碗として使われたものと考えられます。近世武家文化の一端を偲ばせます。南丹市園部城跡では、18世紀頃の九州肥前（佐賀県）産の鍋島焼皿などが出土しています。鍋島焼は、佐賀藩直営の焼き物であり、大名間などの贈



宮津城跡出土のヨーロッパ陶器



宮津城跡出土の朝鮮王朝陶器

答用に作られた精巧な磁器で、原則として一般に出回ることにはないといわれている焼き物です。いかにも近世大名の城跡からの出土遺物としてふさわしいものです。なお、亀岡市以北では、これ以外に鍋島焼の出土は確認されていません。

木津川市の木津遺跡では、溝や土坑から多くの陶磁器片が出土し、室町時代前期から江戸時代中期に至る日常雑器の変遷が明らかになりました。南西から北東方向に延びる断面「V」字形の溝には、14世紀から15世紀前半までの土師器皿が大量に捨てられていました。近世の土坑や池に切られた溝からは、15世紀後半の土師質や瓦質の羽釜はがまや播鉢すりばちが出土

しました。その溝を切っている池からは、16世紀前半の土器や陶磁器が出土しました。もう1か所の池からは、16世紀中頃から後半の土器・陶磁器が出土しました。土師器皿や羽釜のほか、美濃産の天目茶碗や灰釉の皿や椀、中国製の青花小皿が含まれます。



木津遺跡から出土した日常雑器類

長楕円形の土坑からは、17世紀後半の遺物が出土しています。ここから出土した焙烙は、16世紀の土師器羽釜と、17世紀末から18世紀前半の焙烙（素焼きの平たい土鍋）の中間的な形をしています。木津地域に特徴的な焙烙の原形が羽釜であったことがわかります。18世紀の入ると、焙烙の形に退化も認められ、年代の目安にできるほどです。

瓦質の甕を埋置した墓と見られる遺構からは、肥前陶器（唐津）の銅緑釉皿が出土しており、17世紀末頃の年代が与えられます。

便所の可能性が考えられる埋桶遺構などからは、17世紀末から18世紀前半の陶磁器類が出土しています。肥前磁器（伊万里）の「くらわんか手」の染付椀・皿類が圧倒的に多く、肥前陶器の刷毛目椀がこれに次ぎます。ほかにも肥前磁器と思われる青磁の大皿などがあります。包含層からも、肥前陶器三島手の大鉢が出土しています。

京都市内の資料によると、16世紀末から17世紀初頭にかけては、黄瀬戸・志野・織部・唐津などの侘び茶関係の陶器が大量に出回り、その後、ほとんど唐津系陶器一色になり、中頃には初期伊万里系染付磁器が出現し始めます。16世紀の食器はまだ中世的ですが、18世紀の食器は現代に直結していることがわかります。（小山雅人）